

## 第 89 回 東葛しぜん研修観察会

### 自然と文学よもやま話

小島紀彦（我孫子市）

日時：2021 年 2 月 27 日（土） 15 時 30 分～16 時 45 分

場所：テレワーク Zoom 研修会 パレット柏からの講演、講師：山口正明

参加者：生田、小川、片岡、勝股、川瀬、草野、小島、白木、渋谷、鈴木俊、鈴木と、  
田島、西河内、長谷川、日野原、藤田、前田、三嶋、山口、龍門 20 名

○生態系のサービスの説明から始まる。①供給サービス。

②調整サービス。③文化的サービスがある。

生態系が人間に対して提供する様々な価値を利用する。

今日はこの③の文学的な部分の話。

- ①野草の部：ヤマオダマキの写真の次に Who am I? となり、萩原朔太郎の詩集から「夜汽車」の詩の中に「—— ところもしらぬ山里に さも白く咲きてゐたるをだまきの花」との文面からの説明。ヤマオダマキは赤紫色、ミヤマオダマキは青色であり、どちらも適さない。多分「キバナオダマキ」でないかと、山口さんが八島湿原で撮影された写真を見せて貰った。萩原葉子の作品「朔太郎とおだまきの花」から、朔太郎はオダマキの花が好きだったとの説明あった。
- ②木の部：ヤマモモの実が成っている写真の次に Who am I? となり、宮尾登美子の出世作である。「樺(かい)」の冒頭に出て来る「—— ふと、あ、もう間なしに楊梅(やまもも)売りの姐さんが出てくるよ、と思った」との文面から ヤマモモの説明になる。ヤマモモは初夏に赤い丸い実になり、高知では旬時にはヤマモモの実を食べる習慣があった様。ヤマモモは 高知県は県の花になっており、徳島県は県の木になっている。いずれにしても四国と関係が深い木というか実である。宮尾登美子は他に「楊梅の熟れる頃」という本もあり、季節にはこの実を売って廻る「ももえー、もも、えー」との呼び声をあげて売り廻る風習が風物詩であったようだ。ヤマモモの実は傷つきやすく、日持ちのしない果実で、旬に食べないと夏が来ない感じだったみたい。
- ③虫の部：コエゾゼミの羽化の写真の次に Who am I? となり、藤沢周平の「蟬しぐれ」の文章に出て来るセミは何ゼミか との話。この小説の舞台である山形県庄内地方で見られる(声が聞ける)蟬は 5 種類。冒頭の「頭上の櫟の葉かげのあたりで蟬が鳴いている」⇒ニイニイゼミ。前半部「矢場跡の雑木林で騒然と蟬が鳴いている」⇒ミンミンゼミ or アブラゼミ。終盤の「黒松林の蟬しぐれが耳を聳するばかりに」⇒ヒグラシ との説明があった。山形県に因んで、松尾芭蕉の奥の細道で詠まれた有名な俳句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の蟬は？ 昭和の初めに斎藤茂吉が「アブラゼミ」、小宮豊隆が「ニイニイゼミ」と主張し文学者間で大論争になった。結果はこの句が詠まれたのは新暦で 7 月 13 日であり、山形ではアブラゼミはまだ出てきていない、ニイニイゼミの方が的を得ている事になったとお話でした。



講義を聞いた感想は、我々の好きな自然のものを対象にして、文学(小説)などからひも付きをして一部は科学的な部分との関連から、何かな？ 本当かな？ と考える楽しさや奥深さを感じました。私のような小説好きにはたまらなく楽しい時間でした。講師の山口さん、世話役の皆さまに感謝です。